

水曜日の出来事を送ると？

不思議なプロジェクト



海の上の小学校
を舞台に始まった
手紙交換

「海の上の小学校」として知られる旧赤崎小学校を舞台として、平成25年6月19日に開局した赤崎水曜日郵便局。水曜日の出来事を書いた手紙を同郵便局宛てに送ってもらい、それを無作為に別の差出人に転送します。手紙を通して、全国の知らない誰かとつながっていくという何とも不思議な仕組みになっています。



2000通
を超える手紙

開局から現在まで、ほぼ全都道府県さらに世界4カ国（外国へ手紙の転送は行わない）から手紙が届けられています。毎月100通以上の水曜日



地域住民とも
つながる

住民参画型アートプロジェクトという名のおり住民と協力して作り上げるプロジェクトを目指しています。

赤崎水曜日郵便局に設置された「スイスイ箱」、「灯台ポスト」これらもアーティストと地域住民が協力して発案・作成したもので、伝馬船の廃材や小学校の机など



転送作業を行う実行委員



スイスイ箱

どを使って作られています。「灯台ポスト」はプロジェクトのシンボル、「スイスイ箱」は郵便受けとして活用されています。

同郵便局宛てに届いた手紙を紹介する毎週水曜日のラジオ番組の放送（平成26年9月休止。現在リニューアル中）では町民が全国から届いた手紙を朗読する番組もあります。



ラジオで手紙
を朗読した

かなざわ
金澤 ころちゃん
浜崎地区 10歳
津奈木小学校5年

interview

図工の授業や絵を書くことが好きで美術館のワークショップにはよく参加していました。そのとき、美術館から「朗読してみない？」と誘われてラジオ朗読会に参加しました。読んだ手紙は、岡山県に住む10歳の女の子が2分の1成人式をしたことでした。朗読は、難しく少し緊張しましたが、この赤崎水曜日郵便局はいろんな遠いところから手紙が届いてすこいと思いました。

水曜日という 忘れてしまいそうな 日常に想いを馳せてほしい



赤崎水曜日
郵便局の誕生

赤崎水曜日郵便局の生まれは平成20年から始まった「住民参画型アートプロジェクト」でした。これは、毎年アーティストを入れ替えながら、町の自然や旧赤崎小学校校舎などを活用して行っていたものですが、平成23年に校舎の耐震問題が発覚し、校舎内の立ち入りが禁止となりました。それでも、どうか活用できないかということ、まずは、同小学校の



水曜日に
込められた思い

「津奈木町大字福浜165番地先」という珍しい住所を活かそうと考え、住所と言えは「手紙」、「手紙」と言えは「郵便局」というように同プロジェクトは考案されました。

土・日曜日だとたいいてい皆さん休みで書くことも多いと思います。あえて水曜日という、平凡な日に手紙を書くことで、忘れがちな自分の日常を深く考えてもらいたいです。

また、旧赤崎小学校は海（水）の上に建っており、水は島と島、大陸と大陸をつなぐ役割をもっています。また水曜日は週の真ん中。そこにも一週間をつなぐという意味が込められており、津奈木町とみんなの日常をつなぐこのプロジェクトにぴったりの曜日だと思います。



見ず知らず
の人とつながる
不思議な魅力

見ず知らずのたくさん人た



デジタル社会
だからこそ

直筆のものは書いた人の分身のような存在であって全ての文字が同じ形ではなく、まるで生きてるようにも思えます。しかし、情報化社会といわれる現代でのメールやデジタルの中での文字は、全てフォントに変わってしまい、文字の書き方や感じから相手の人柄・性格が伝わらなくなってしまう。この赤崎水曜日郵便局を通してデジタルには無いアナログの持つ「温かさ」や「価値」を再認識してもらえたらと思います。

手紙を書いて
みませんか？



便せんにあなたの水曜日の物語や出来事などを書いてください

宛名（赤崎水曜日郵便局行）が見えるように封筒に戻し切手を貼ってポストに投函してください



届いたあなたの手紙は、同じく赤崎水曜日郵便局に手紙を送った誰かの元へ届きます。



あなたのもとへも知らない誰かの水曜日が届きます。



水曜日に開封して、どこかで生まれた誰かの水曜日の物語を読んでください

interview



赤崎水曜日郵便局プロデューサー

楠本 智郎さん

つなぎ美術館学芸員